

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.7】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

先月末に、OTOTEN2019 が終了しました。各社の工夫を凝らした展示やデモンストレーションに加えて、オーディオスタートコーナー、映画を聴こうプロジェクト、音のサロン、各種セミナー、カーオーディオ体験など、様々な楽しみ方を訴求することができ、多くの方々にご来場いただき、心より感謝申し上げます。

また今年は、音響芸術専門学校の若い学生さんたちにコンシェルジュスタッフとしてサポートしていただき、会場にフレッシュな華やかさを添えていただきました。

ご来場者の会話をなにげなく聞いていると、こんなに面白いと思わなかった、と話す若い女性二人連れがいたり、小さなお子さんの手を引いて楽しんでいらっしゃるご家族がいたり、いつもとはまた違う風景もあり嬉しくなりました。また同時に、魅力あるプログラムをもっと増やし、ご満足度の高い、リピートしていただける、新しい方にも来ていただける、そんな OTOTEN にしていきたいとも思いました。あいにく天候が悪く、ご来場人数は目標の2万人には届きませんでしたが、いらっしゃった方には、ほぼご満足いただけたのではないかと思います。

さて、音の世界は無限である、と私は常々思っています。母の胎内で最初に造られ機能する感覚器は聴覚。人は誰もがこの世に生まれる前からお母さんのおなかの中でこの世の音を聴いています。胎教と言われるように、胎内で聴いた音が、生まれてからの感性に影響していることを私自身が体験しています。そのように音の感覚は、非常にプリミティブな何かを脳に与えているのでしょうか。音を聴く、という行為が様々な手段で可能になる中、最近、ラジオを久しぶりに家で毎朝聴くようになって新鮮な何かを感じています。想像の翼が自由に羽を広げるような、頭のストレッチができるような、そんな感覚です。独り住まいの社宅での朝は、テレビではなくラジオを流して、通勤前の準備をあれこれとするわけです。



クイーンの Radio Ga Ga は、多感な青春時代の友達であったラジオを主役にした歌です。私も中学高校の頃は毎晩ラジオを楽しんでいました。受験勉強もラジオを聴きながら、というのは私

と同年代の方々なら、そうそう、と、うなずいてくださるに違いありません。あの頃は、ラジオを聴くことが習慣になっていましたが、ずいぶんと時を経て、視覚からの映像情報に支配されることに慣れた身には、ラジオを聴くという行為からもたらされる感覚刺激に、なんとも言えない新鮮な心地よさを感じるのです。人の声の場合、テレビで話す人の顔を見ながら声を聴くと、顔という強烈な情報に脳が大きく反応してしまいます、またテレビでは話し言葉が



文字情報となって映し出されることが多いために、声を聴くというより、文字を読んでしまいます、このように視覚からの情報が非常に多くなりますが、ラジオの場合は、話す人の声だけがストレートに脳に入ってくるわけで、それが神経経路の違う刺激として、冒頭申し上げたプリミティブな何かを感じる、ということだと思えます。それと、最近ではテレビが大型化され、人の顔が大映しになると、とてつもなく大きな顔情報が強烈な視覚刺激となるために、脳内の処理も変わってきているのではないかと思います。

家の中で、さりげなく音だけを聴く体験を、もう一度復活させたいのは、人の感覚自体に余裕ある想像力を取り戻したいと思うからでもあります。

次回に続く。。。。

